

# あさひ文学

第19回美術展参加号  
令和7年3月8日発行



飯岡海岸

旭市文化協会 文 芸 部

# あさひ文学

第十九回美術展参加号

# 目次

「萬屋」の思い出	文芸部長	相沢 弘幸	1
千潟八萬石ことばと習俗	前文芸部長	花香 竹夫	2
俳句		椿の会	3
俳句		さざなみ俳句会	6
俳句		春蕾俳句会	12
俳句		山火俳句会	16
短歌		真心短歌会	17
短歌		しのび坂短歌会	18
旭市の相撲行事	東総郷土史研究会	千本松 稔	20
父と母の小さな思い出	海への会	渡邊 昌子	21
イランへの旅(一)	さざなみ会	鈴木 和江	22
読書と映画鑑賞	さざなみ会	岡野 京子	23
編集後記			24

表紙の写真

飯岡海岸護岸竣工碑

## 「萬屋」の思い出

文芸部長 相沢 弘幸

俳句では、自分の感情、嬉しい、悲しい、楽しい、美味しい等をそのまま文字にしないで、その感情を対象物の物に託するのが良いとされている。俳句は短い定型詩なので、感情をよく咀嚼し、自分のひとりよがりではなく、より普遍的な形に昇華させることだという人もいる。でも、物に言わせることのできない程の感情もあるのではないだろうか。

JR猿田駅前にあった「萬屋」は、そば、うどんのどちらも絶品の美味しい店だった。いつも行列の店で県内外ナンバーの車で駐車場は満杯だった。「そばを注文したのに、これはうどんではないの？」という客もいたが、更科そばはうどんと見間違える程の白さなのだった。試しに食べ比べてみるとその食感は全く違う。職場が近かったこともあり、仲間と連れ立って行く時には、12時過ぎに行くので用意しておいてください、と言って短い昼食時間に駆け込

んだ。私の定番は「やさいおろしの中盛りうどん」だった。大きな器になみなみとうどんが盛られ、やさいの天ぷらとともに、若者のお腹をいっぱいにしてくれた。

退職して、しばらくぶりに「萬屋」に行ってみようかと思いつち、店先に立つたら貼り紙が・・・。

「三月をもちまして閉店とさせていただきます。長い間有難うございました。店主」と。呆然と立ち尽くす。昔、土間だった頃はおばあさんが切り盛りしていた。田舎から出てきた母親を連れて行き「美味しい蕎麦屋さんだね」と誉められたこと。店で、ときばきと立ち働く人、厨房で湯気の中にそばを茹でている人、いろんな事が一気に蘇ってきた。しばし呆然とし、踵を返すことができない。

### 閉店の貼り紙 哀し冬すみれ

哀しと三文字の言葉を他の言葉に置き換えることが出来なかった。あの時も、今も。

(萬屋さんは2022年3月に閉店)

## 千瀉八萬石 ことばと習俗

〃ノウ〃について

前文芸部長（学芸員） 花香 竹夫

我が千瀉八萬石地方の言葉について五回（①ノウ②叭③わたまし④オアガンナ⑤おかねい）に分けて採り上げる事に致します。今回は①ノウについて考えます。

刈稲やわらを、穂先に内にして円錐形や矩形に高く積重ねたものを、当地ではノウと呼んでいた。今ではすっかり姿を消していますが、他の地方では「ニオ」と呼ぶのが最も多く、ノウはニオの変化したものと思われまます。ニオは新嘗のニヒ、新しい供物をさすニヒという言葉とつながりがありそうだとされています。古くは田の神に捧げた穂つきのままの供物を、ニへと呼んだそうです。

当地でも、稲の刈上げには二株の稲の穂を互い違いにして束ね、これをカッチゲエと呼び、土間に白を伏せ、その上に供えて田の神を祭りましたが、昔は一般にノウ場で他の神を祭ったそうです。屋敷つづきにノウ場または稲場と呼ぶ所があつて、脱穀するまで稲を積んでおいたものです。

金扱かなごぎ（千齒）から足踏脱穀機の時代は、扱はまだ天日干し

で、脱穀には日時がかかりました。耕地整理が進んで乾かし、その場にノウ積みするようになり、晴天が続くと広い千瀉八萬石の耕地にまたたく間に無数のノウが出現したものです。丸ノウや舟積みノウ、少々乾きの悪いと思われるものは十文字形の四ツノウなど、様々なノウが積まれました。

然し牛馬による運搬からトラックに替わり、脱穀機も自動となり、現在はコンバインに変わり、天日干しも乾燥機にとつて替わられ、脱穀作業が容易になって、長くノウに積んでおく必要がなくなつたのです。

秋のノウ場には、合掌造りの屋根のような稲架も見られましたが、この姿もすっかりなくなりました。

また、牛馬の飼料に、わら仕事にと、年中わらを取りにノウ場に足を運んだものですが、今はなくなり、ノウ場という言葉も忘れつつあります。

（つづく）



俳句

椿の会

荒木 美枝子

葉牡丹や出番近しと渦極む  
秋団扇見慣れた柄の素っ気なし  
綿虫や追へば遠目の端に消ゆ  
垣越しに蒲団干す人雲流る  
三寒の小袖四温の風にあて

渡邊 耕佑

大寒の長湯へ妻が覗き来る  
地に咲くとみれば安らぐ落椿  
冬木に芽幼き命抱きしむる  
梅の実や一粒種の赤子抱き  
日向ぼこ夫婦茶碗の寄り添えし

花園 千名美

明月院地蔵のかひな四葩よひらだく  
俄雨はじ弾き返して手毬花  
家混みにて拜めぬ月の供えもの  
大暮れや時速百キロこの一年  
松過ぎて鏡の中に疲れ見ゆ

浪川 秋花

半世紀逢へぬ友あて書く賀状  
「おはよう」の野球少年息白し  
襟立てて告知受けての家路へと  
元日や初めて臨む吾の命  
蒼天に蠟梅ひとつほころびて

守部 洋子

冬ぬくし砂紋に一羽白い鳥  
千騎ヶ岩洞うろの向こうに冬の雲  
犬岩に冬波転び来て遊ぶ  
掌に取りてオトギリソウと教えらる  
児を抱く石仏の膝冬陽濃し

高木 健寿

一人席サンマ定食大盛りで  
立て看のグラスの泡や秋の風  
ほうき星三脚並ぶ秋の夕  
背伸びして甘酒供え秋祭り  
蠟梅や苗から四年初蕾

早川 悟

竹林の老老の背に春温し  
店じまいお客の劳い冬温し  
友ふたり逝きし秋風祈るのみ  
冬夕焼浮かぶ富士山みびろ坂  
秋空に色増す柿に目細め

伊藤 あき子

秋空の流れる雲の七変化  
この暑さ何時なのか空を見る  
ふと見れば黄金色の月昇る  
つかの間の秋を楽しむ散歩道  
冬の海賑わい消えて波静か

宮内 幸平

紅葉狩り便りは遠き色模様  
隣より頂き秋刀魚炭火焼き  
軒先の風鈴淋し忘れ物  
散歩道紫陽花眺め川つづみ  
夏の朝彩とりどりの花をつけ

高品 彩

手を繋ぎ山茶花の歌口遊ずさむ  
藪椿一輪なれど森の主  
靴下に聖夜を祈る子の寢息  
裸木の静かな叫び風が消し  
髪を染め扉開きて春を待つ

和 日和

年の瀬や人人をかきわける  
年の瀬や三尺下がりに行く夫  
百八ツの最後の鐘に鳴る霧笛  
キャンパスの銀杏の影の凍る朝  
悔恨は百と八ツの音ねと共に

相沢 弘幸

引く網に跳ねる銀白さんま漁  
雑踏の駅の角打ち今年酒  
偶にはと君と月夜の遠回り  
シヤリシヤリと梨を剥く音甘き音  
恒河沙の果てに誘ふ寒昂

俳句

さぎなみ俳句会

鈴木 和江

良き事の多きひと日よ大根煮る  
暮早し信濃の山は連なりて  
同胞のつぎつぎ集ふお正月  
潮騒の絶ゆることなき年越ゆる  
菜の花に菜の花色の電車過ぐ

諸持 耕太郎

冬帝のデンと居座る日本海  
童らの明るき声や春隣  
ひつじほやみずほの神の落とし物  
石垣や古城のなごり青葉風  
万緑や白球高く場外へ

相沢 弘幸

虫の声星降る夜のソロキヤンプ  
犬吠の猛る海鳴り冬の夜  
海よりの石段父と初詣  
大幣おおぬきを幼子と受く今朝の春  
春隣術後経過は順調と

伊東 禮子

白蝶や水玉模様のコスチューム  
花の雨車中で季語の話など  
朝の畑三月豆はわかば色  
大谷選手さわやかにホームラン  
いちじくやひとつの時ははんぶんこ

石井 敬子

大海光り穏やかに年迎ふ  
白飯の宝珠となりし寒卵  
山茶花や今散り乍ら咲き乍ら  
枝先の膨らみ始む春まぢか  
大鷲や海辺の邑を旋回す

石井 孝

腰下ろし想い巡らす秋の浜  
秋深しシヨパン流るる純喫茶  
藹藹あいあいと昭和生まれの初句会  
初場所や化粧回しの郷土愛  
日差し受く煌めく波間春近し

大後 秀樹

こぼれ日の土に訪ふ鋏始  
捨て置ひた大根の花背くらべ  
列島に龍の逆鱗秋出水  
新ホースしごく火消しの十二月  
パンフレット見つめる二人春近し

岡 邦俊

ふくろう梟の耳なし芳一かたりさう  
糠床へ塩を足しけり春隣  
盛り塩を淑気に添えて大女将  
退院の夫の耳搔き福寿草  
金網の無き沖繩や貊枕

岡野 京子

石投じ安保闘争火蛾の群れ  
爽涼や紫の花集め挿す  
壊れてるジュークボックス虫時雨  
パワハラの上司の胸の赤い羽根  
除夜の鐘厨で独り刃研ぐ

鎌田 とみ子

前撮りの振袖の娘や秋日和  
灯台の螺旋に抜ける風さやか  
歳時記に挟まれてゐる赤い羽根  
産土の下草の奥竜の玉  
忘れ花朽ちる空家はそのままに

栗栖 峰子

除夜の鐘あと追うこだま京の夜  
「受かった」と受話器の向こう春隣  
すくも焼く今日のおさんじ焼芋ぞ  
冬の波岩をも丸く削りおり  
帰省子や一品多し卓の上

佐久間 松枝

冬日和輪になって憩う子等は黙  
九十九里真砂積もりて浜昼顔  
朝日受け出勤の車サングラス  
初詣名高き寺の人集り<sup>だか</sup>  
新年の長蛇の車列平和かな

高野 一枝

保育器を見つめし母や龍の玉  
ドクターのイエローカード食の秋  
母逝きて近くて遠い曼珠沙華  
焼秋刀魚食べ方美しいサウスポー  
差し入れの焼き芋届く裁縫所

高野 寿美子

下萌や流れの細き用水路  
卒業のなきが嬉しや句の講座  
青芝や飛石白き夕間暮  
アンテナのほのかに光る月の屋根  
爽やかや句の先輩は百二歳

高野 富子

端居して指折り数え俳句詠む  
春耕を継ぐ人無き定めかな  
日だまりの庭にひっそりかえり花  
初夢や亡き母は唯笑顔なる  
白富士や夕焼眩し地平線

滝澤 昇

春愁や廃車になりて車庫広し  
やわらかく沈む廊下や春の風  
春の日や古民家覗く手斧跡  
脳ちようなの霧晴れてくれぬか春を待つ  
春暮るる雄弁になる無言館

並木 紋子

蟪蛄の枯れきれぬまゝ命尽き  
此処住めば此処が極楽竜の玉  
唐辛し強情張りは親ゆづり  
歩けども歩けどもまだ鰯雲  
ホロ酔いの父の帽子の赤い羽根

林 利恵子

菜の花を見せたき未だ戦渦の子  
ふるさとへ続く線路やさくら餅  
遠足や母に草摘み吾子帰る  
除草器の金切り声や夏近し  
退院の朝さわやかに靴を履く

平山 伸

向日葵の一斉に咲くクラス会  
七輪の油滴るきんまの香  
秋深し鑑賞の日や一村の画  
猫の眼に陽の温かや春隣  
永き日や畑一面のマルチ張り

深堀 和子

抜かれゆく血液二本九月尽  
虫すだく母の押入れ母の色  
御詠歌に鈴ふる阿闍梨あじやり冬ぬくし  
埋火の灰かにまとふ飛驒の宿  
恙なく浸かる終い湯除夜の鐘

松本 祥子

潮騒や句碑にかくれし竜の玉  
小春日の走者を待ちし富士の山  
寒風の灯台の白奪ふかに  
待春の堤防に画く竜の顔  
ひとにぎりの砂暖かき春の海

柳堀 節子

野馬追いの神旗掲げる武者若し  
地に花野空護り征<sup>ゆ</sup>く戦闘機  
席譲る瞳爽やか女子高生  
かぐや姫の難題ここに龍の玉  
谷川の渺<sup>びようびよう</sup>渺たるや春隣

吉田 哲子

波しぶきジェットスキーに風光る  
ろくもん銭子らが手を振る初夏の旅  
喪に伏して胸の痛みの朧月  
突然の仏<sup>いじ</sup>弄りや子の施餓鬼  
春隣胎内写真手渡さる

さぎなみ会オンライン句会

第48回オンライン句会 並木 紋子

・ 煩惱の行きつ戻りつ除夜の鐘

第49回オンライン句会 鎌田とみ子

・ 綺羅星にWiFiが飛ぶ冬の夜

俳句

春蕾俳句会

宮負 克己

師走の事誰が言へ初め十二月  
苦しき事勘定日待師走かな  
生きて行く途中には十二月  
正月を傷ついて居り句にいやされる  
人の世に無くてはならぬ十二月

石毛 せつ子

牡丹散り彩り一つ閉じし庭  
油蟬一途に鳴きて次の木へ  
盆行事仕来たり薄くなる世かな  
裏山の風と連れ立ち赤とんぼ  
露草のきらめく影や用水路

花香 竹夫

眺めみる田面戦ぎしあいの風  
風薫る田面耀う水明かり  
山襷の幽き月夜の花明かり  
堰落つる水の豊かさ春来たる  
昏れいそぐ川一筋の雪催う

菅谷 茂穂

石仏や厳しき残暑受けて立ち  
山里の朝爽やかにししおどし  
明易し七面山の雑魚寝かな  
家の中広げし本の曝書かな  
万緑が鳥声運ぶ狭田かな

花香 静子

秋風や行ったつもりで旅チラシ  
秋時を異常気象に惑わされ  
野辺送り幼ら交じり鰯雲  
廃屋に狸住むとさ月明り  
猫に隠れ猫の破った障子貼る

荒木 悦子

着ぶくれた療友の指差す窓の月  
尾花さえ咲かぬ暑さの月明かり  
昼顔の花に連られて風岬  
トマト売る農学生の初心な声  
能登復興成り立たぬまま盆が来る

花香 勝夫

草の名を忘れて暫し風薫る  
泣き疲れうすばかげろう夢遠し  
星涼し友は何処に輝ける  
鴨の群喜怒哀楽の騒ぎかな  
雪女郎夢に訪づれ消えにけり

佐伯 洋子

しみじみと来し方思う良夜かな  
霜の花広田一面輝かせ  
ぬか床を丁寧に混ぜ年惜しむ  
苗札の旧仮名づかい妣の鉢  
花の種迷った拳句三種買う

衣鳩 順一

会話無く妻の差し出す蜜柑かな  
窓拭きの妻の背低し十二月  
狭庭舞ふ落葉連れ去る夕日かな  
星涼し飛機の点滅遠退きて  
涼風や神棚の幣揺らしをり

薄田 美津子

遠近の不協和音や原爆忌  
赤子抱くように畑より初西瓜  
逝く秋や片腕欠けし羅漢仏  
帰省の娘たまに寝坊もしたかろう  
衣被真砂女詠みしを味わいて

前田 春代

立春や揺らす地の神風の神  
障子開け新緑芽吹く狭庭かな  
取り立ての胡瓜味噌付け朝ごはん  
ランドセル揺らして走る日の盛り  
コスモスやためらいもなく風に揺れ

阿部 三郎

朝霞にボツチ霞みて世阿弥の刻  
木漏れ陽に落葉踏みしめときめきを  
秋風は急ぎ足で鍋担ぎ  
すすき揺れ雀隠れる干潟原  
猫こたつ足を入れる隙間譲らず

銀原 俊

何着よう春の天氣に問うてみる  
布団から飛び出す足で春を知る  
春雨を逃れ相合い軒の猫  
土喰んでせつせつせと舞う燕  
鮎釣りの川辺に立てば風通る

藤井 愛子

風にのるほのかな香り庭のバラ  
杖ふたつ静かにやすむ日の盛り  
山里の灯かすかや星涼し  
軽やかに夕雲延ばす秋の風  
ひらひらと紅葉降る道手をつなぎ

井沼 雅子

日は西に草の穂光る散歩道  
はじめての句会るんるん天高し  
柿の葉や落ちて色なお美しき  
恩師逝き残りし車秋の暮  
挨拶の声も朗らか小六月

# 俳句

## 山火俳句会

石橋 孝子

浜風に揺れ枝先に新松子  
稲妻の横走りして夜の海  
波を追ひ波に追はれて川蜻蛉  
小春日や波打ち際に鳥羽打つ  
冬怒濤聞きつつ眠る夜更かな

飯田 芙美子

白鳥と鴨鳴き合へり朝の沼  
見物の幼真似する神楽舞  
咲き終る頃か朝顔今朝ひとつ  
稲妻や雲鮮やかに宵の海  
日溜りに軽き音立て杉落葉

### 負担金について

文化協会費 年額 1000円

◎あさひ文学負担金（文化祭 十一月）  
俳句は5句 250円

短歌は5首 500円

川柳は3句 150円

随筆は1頁 1000円

◎あさひ文学負担金（美術展 三月）

俳句は5句 250円

短歌は3首 300円

川柳は2句 100円

随筆は1頁 1000円

◎機関誌「文化旭」掲載（五月）

俳句2句・短歌1首 負担金はなし

◎桜まつり「詩歌大会」応募（四月）

負担金はなし

団体によっては、この他に会費あり。

短歌

真心短歌会

宮負 克己

越し方の全て諦め行かんとす先祖神様前にはばかる  
傷つきて終りかと想う庭先晩菊咲き我を笑う  
賀状一通も書ず病へるなり寒見舞を力入れて書く

花香 竹夫

冬枯れの静けさ通る日を仰ぐ此道行かば我よ勇めん  
独り言多く為り来て冬ざるる歩け歩けや吾れ諫めうる  
岩山の木霊に狎うるるみ仏の在ましする山あり風薫る

# 短歌

## しのび坂短歌会

坂本 昌子

十歳の心に残る「きのご雲」原爆忌永遠とわに忘れてならず  
明日の命の約束有らぬが力ある蝉の声きく晩夏の庭に  
入りつ日を追うがに家路に向かう道彼岸花群れ紅き陰さす

藤井 和子

抜き置きし雑草雨に蘇るその生命力我にも欲しく  
庭先に南天の実の耀よえど啄む鳥の来ぬも寂しき  
箱根路に走りの美はしき若人よ八十路の我の声援届け

増田 満里子

ひとり聞く生家の庭の蝉の声幼日想いしばし佇む  
しやりしやりもざくざく音も快く吹きだまりなる落ち葉の道は  
座席にはスマホ見ている人ばかり都会を走る快速電車

仲村 克子

庭の椅子に暫し休めば我が前を遊べる如く蜻蛉飛び交う  
新米の出回るまでのコメ不足きそいて得たり一つ買ひ足す  
庭の木に遊ぶ小鳥の影動く障子を夫と眺めていたり

八木 佐和子

ひと夏を咲き終わりたる百日紅散りゆくさまも心に残る  
根のもとに多数の新芽宿しつつ夏謳歌して立葵咲く  
紅葉を楽しみにして植えし櫨大樹となりて庭の華やぐ

加瀬 教子

左軸足六歩あゆみし動画来る孫一歳の誕生日とぞ

「歩こう会」中山回遊法華経寺金木犀の香のなかを行く  
恒例の「第九」を聴いて帰る道トンネル越しに黒富士浮かぶ

## 旭市の相撲行事

東総郷土史研究会会長 千本松 稔

### 旭市袋太田神社黒虎相撲

太田神社は袋地区の氏神です。もとは「大六天」と呼ばれ、雨風を司り豊かな稔りをもたらす神として信仰されてきました。<sup>1</sup> 1月1日に相撲が奉納されます。

「黒虎」とは玄人と素人の意味だといいます。土俵の4本柱が玄武（北）白虎（西）青龍（東）朱雀（南）をあらわすところから、黒↓玄人・虎↓素人なのではないかと説明されています。

江戸で修行をしたことのあるような元力士や草相撲を回り歩く「素人力士」、また地元の若者たちがともに楽しむ相撲でした。戦前までは集まった相撲取りが、前日は区長の家泊まり、相撲のあとには氏子総代の家で風呂に入って大宴会をやり、盛大だったが戦後は廃れていきました。

近年は青少年の健全育成と伝統文化の継承のためにと力を入れたのがきっかけになり、平成4年に土俵・四本柱・

行司装束などを再現し、また土俵入りや弓取り式を取り入れて復活させました。

### 旭市井戸野熊野神社

熊野神社は井戸野九地区の氏神です。当番区が大きな白むすびをたくさん持ち寄り四本柱の下に三つずつ埋め、これを力飯といいます。残りは参集者や見物人に配られます。相撲の握り飯には特別な力があるとされます。



旭市袋・太田神社「黒虎相撲」

## 父と母の小さな思い出

海への会 渡邊 昌子

父と母が偶然、山間（やまあい）の同じ小学校に勤務したことがあります。父は校長、母は一教員でした。

昭和三十一年、私が小学三年生頃のことです。

車のない時代でしたから、父は学校までバスで通い、母は自転車で急な坂の続く山道を二時間かけて通っていました。私も何度か休みの日に、母に連れられて小学校に行ったことがあります。ある日はバスで出かけたものの、帰りのバスに乗り遅れてしまい、次の便を待たない母は私の手を引いて山道を歩き始めました。途中で疲れて愚図る私を、母は事も無げに背負うと家まで歩き通したのです。強い母でした。

七月の終業式を間近にした頃だったと思う。その日は台風の影響で朝から激しい雨が降り続いていました。珍しく父と母が夜遅くになって一緒に帰宅したのです。

帰るなり父は囲炉裏の前に座ると腕組みをしたまま、

じっと動かない。母は放心したように家の柱に寄り掛かったままでした。

「よく注意してやったのか」

父の叱責するような声。母は力なく頷きました。

「母さん、どうしたの」

私はたまらなくなって尋ねました。

「母さんのクラスのたかし君がね、雨に足を掬われて排水溝に落ちて流されてねー」

母はそこまで言うのと、涙で後が出ませんでした。すきま風に揺らぐ裸電球の下で、父と母がどんな思いで向き合っていたのか、今となっては知るすべもありません。

今年も、父が植えた庭の梅が、強い海風にも耐えて、淡い桃色の花をいくつも咲かせました。

## イランへの旅（一）

さぎなみ会 鈴木 和江

二十年ほど前になるでしょうか。私共の会社に一人のイラン人が来ました。片言の日本語で給料が貰えず大変困窮しているとのこと。大きな不安があったのですが、少しの間、面倒を見ることになりました。「イラジュ」という名の彼は国では小学校の先生をしていたとのこと、とても誠実な青年でした。

資金が出来るかと彼は帰国して、イランで不動産業で成功し「ぜひイランに来てください」と再度の誘いに、意を決し行くことにしました。でも、当時のイランはビザの取得が大変でした。本人は勿論、両親の住所・氏名・生年月日の証明が必要だったので。

五月の連休に間に合うようにと一月の内に主人と私、同行の二人合計四人の申請をしましたが、許可にならなかったのが、四月の下旬でした。女性は私一人です。ビザが取得でき、出発することが出来ることになり安堵しました。

イランエアラインの機内に入ってびっくり。CAの服装、チャードルという頭からすっぽり黒いコートを着、頭に帽子を被っているのです。機内は一切のアルコールは禁止です。女性はスカーフで髪を隠すのです。離陸前から機内はすでにイランの国となっています。男はノーネクタイです。ネクタイは反イスラムを現すということなのです。どんなフォーマルな場所でもノーネクタイです。

この旅は七泊八日でした。イランまでは北京でのトランジットを含め十四時間。時差は五時間です。当時の北京空港はオリンピックに向けて沢山の重機が急ピッチで工事をしており、その様子が飛行機の窓から窺えました。

成田空港と違い、イランの首都テヘランの空港の手際の悪さにいらいらしつつ、イランに入国しました。

空港に出迎えのイラジュ一行の顔を見つけた時は、嬉しくて跳び上がる思いでした。テヘランはイラン高原の西北部、標高千二百メートル余の高地にある都市ですが、遠くに見える山々の峰は雪で真っ白でした。

（以下次号へつづく）

## 読書と映画鑑賞

さぎなみ会 岡野 京子

好きな映画と、その作品の原作となった同名の小説について書いてみようと思います。

【永遠の0<sup>ゼロ</sup>】は現代の青年が、自分と同じ歳で命を散らせた特攻隊員の祖父の人生を辿るなかで、関わった人々の想いに触れていく物語です。主演は岡田准一。日本アカデミー賞で8部門を受賞しています。著者の百田尚樹氏は、気に入った脚本に出会えず映画化を諦めていました。そんな折、山崎監督のシナリオが、長編の原作との違いを全く感じさせない見事なストーリー展開だった為、映画化を快諾したそうです。

藤沢周平氏の短編時代小説【たそがれ清兵衛】も、とても好きな映画です。主演の真田広之演じる清兵衛は、妻に先立たれ、藩勤めから帰ると、内職と家事をし、何とか家族を養っています。ある日、清兵衛の剣の腕前を知った藩

から、上意討ちを命ぜられます。構想に十年以上、時代考証に一年以上かけた山田洋次監督の渾身の一作です。細部までリアリティを感じさせます。一刀流の剣客との迫力あるシーンは見応えがあります。一方、小説では剣戟<sup>けんげき</sup>の場面が凝縮された表現で、さらっと描かれています。著者の言葉の選び方が的確で、人の心の深部が伝わってくるのです。

映画は映像・音ですが、小説は文章のみです。視覚的でないぶん、読み手の内面のイメージが、より広がっていくのかもしれない。

映画は、制作する側の、原作の切り取り方や強調したい場面によって、違った作品になることもあります。

表現方法は色々あるから面白い。認め合い融合して、新しい作品が、どんどん生まれる世界であってほしいと思います。これからも読書や映画を自由に楽しめる時代が続きますように。

## 編集後記

旭市文化協会文芸部では、新規会員の加入に努めてい  
ます。気軽にご参加ください。

### 現在の文芸部所属団体

俳句 ◎山火俳句会（旭） 代表者 飯田芙美子

旭市口の271の2

◎春蕾俳句会（千潟） 代表者 花香 竹夫

旭市萬歳308の2

短歌 ◎真心短歌会（千潟） 代表者 宮負 克己

旭市清和乙701

◎しのび坂短歌会（海上）

代表者 加瀬 教子

旭市蛇園2876の2

歴史 ◎東総郷土史研究会（旭）

代表者 千本松 稔

旭市椎名内3071

エッセイ

◎海への会（飯岡） 代表者 渡邊 昌子

旭市下永井779

エッセイ・俳句・短歌・川柳

◎椿の会（旭） 代表者 荒木美枝子

匝瑳市吉田3086

◎さざなみ会（飯岡） 代表者 滝澤 昇

旭市平松1583

### あさひ文学

第十九回美術展 参加号

発行 旭市文化協会 文芸部

発行日 令和七年三月八日

編集 相澤 弘幸

連絡先 旭市高生四九〇―九

相澤 弘幸

電話・Fax 0479-55-6116